

四 指導の実例

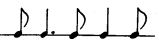
資料(一)

第1次 リズムカード作り

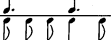
(1) ねらい リズムカードを作ることにより各拍子の基本リズム型を理解させる。

(2) 学習活動 ○リズムカード作りをする。
○(以下省略)

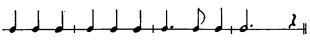
(3) 留意すべきことア、拍子数が合えばよいとして、実際には歌えないようなリズムを作ることがあるので注意させたい。
悪い例



イ、拍の合成に留意して作らせる。



ウ、リズム聴音をする。



資料(二)

第3次 続きの節作り

(1) ねらい 即興的に続きの節を作り、まとまりのある2小節の節を作ることができるようにする。

(2) 学習活動 ○教師が弾いた節をすぐ階音で歌う。○次にその続きの節を作る。
○頭取り、しり取りをする。(しり取りは省略してある。)




資料(三)

第8次 曲の形式

(1) ねらい 曲の形式について理解する。

(2) 学習活動 ①一部形式について理解する。
イ、「いちご」を歌い(a+a')を知る。
ロ、「春が来た」を歌い(a+b)を知る。
②二部形式について理解する。(省略)
③教科書の中から一部形式と二部形式の曲をさがし、曲の形式を調べる。

第9次 リズムの統一と変化、反復と模倣を生かした旋律

(1) ねらい リズムのよしあしが曲のよしあしを決めると言われているが、児童は意外にリズムの使い方がへたである。そこで既習教材をもとにして、リズムの統一の良さ、また反復、模倣を生かした旋律のよさについて理解させる。

(2) 学習活動 (省略)

学習活動及び内容	指導上の留意点
①示されたリズムを見てリズム唱打をする。 (OHP)	先生 ・即興的に、まとまりのあるリズムフレーズを作らせる。
②笛でリズム奏をしたり、シラソの音で旋律の即興奏をする。(OHP)	先生 ・わらべ歌の節作りをさせ、なるべく、⑦で終わらせる。
③先生のリズム奏に続けて、笛でリズム奏をする。 (OHP)	先生 ・笛の音の高さを色別で表し、目と耳の両方からつかませる。
④できたら、シートに記譜する。	先生 ・フレーズのまとまりに注意して節間答させ。
⑤先生の旋律奏に続けて、シラソの音で笛の即興奏をする。(OHP)	先生 ・拍の流れのついでで吹く。
⑥できたら色別カードを机の上に並べる。(二小節の節) ⑦赤 ⑧緑 ⑨黄緑の青	先生 ・フレーズのまとまりに注意して節間答させ。
⑦グループで発表し合う。(節間答)	先生 ・拍の流れのついでで吹く。
⑧グループの良い作品をシートに書く。	先生 ・拍の流れのついでで吹く。
⑨グループの代表が発表する。(OHP)	先生 ・拍の流れのついでで吹く。

二、中学年の旋律創作指導の実践

(一) 題材 節づくり (笛)

(二) 目標

決められたリズムを用いて、笛で旋律の即興奏ができる。

(三) 学習活動例 (展開案)

三、指導の後を振り返って

中学年の場合は、あくまで楽しくできることをねらいとすべきである。教師自身も指導法に創意と工夫を凝らし児童に興味を持たせながらむりなく力をつけるようにしたいものである。笛の音の高さを色によって再表現(再確認)させ、シラソの三音を使つてのわらべ歌ふうの旋律による節作りには、たいへん効果的であった。また、OHPを使つて色別に写し出したら、歓声をあげて喜び、生き生きとした学習が展開された。

高学年の場合も、教科書に示されている創作の学習を、二十分くらい断片的に行つても決して効果はあがらないだろう。児童に意欲を持たせるには、それなりの教師の熱意と工夫が必要であることを、今痛感しているしだいである。



(教諭 後藤昌子)

□ 考察 □

音楽科においては、創作領域が手薄になりがちである。また、指導も断片的になりやすいことも指摘されてきている。

こういった中で、計画的に、しかも児童の興味をひきながら指導を継続してきたこの実践例は、数多くの示唆を与えている。

その第一は、児童の思考の過程や速度に合わせてリズムを提示したり、旋律の比較をさせていることである。このことは、OHPとシートの特性をじゅうぶん生かした扱いといえることができる。単一シートでなく、「重ねる」、「分解する」、「消す」再現する」といった方法を駆使しながら、児童の理解や反応に即応した扱いを試みるならばその効果はいっそう高まるものと考えられる。

第二は、色彩の効果を生かしているということである。投影した映像の中のある部分の相違を分類・区分したり問題の中心点や部分を強調したりするために、各種の色彩は際立った効果をもたらす。これは、児童の問題意識や関心を高め、興味、注意力の集中化を図ると同時に、内容理解を容易にするという利点につながる。

第三は、教師のアイデアが生かされていることである。児童の学習の様相をよくみつめ、問題点を解決するため工夫と努力は、高く評価されよう。